

地域の教育力を高めるために

——— 心の教育推進モデル市町村事業の取り組み ———

生涯学習課 中 島 祥 文

はじめに

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申では、子供たちに「ゆとり」の中で「生きる力」を育てていくことが基本であり、「生きる力」は学校、家庭、地域社会がお互いに連携しながら社会全体で育むものであるとしている。さらに、平成10年6月の答申（「新しい時代を拓く心を育てるために」）では、「次世代を育てる心を失う危機」として「心の教育」の必要性を強く求め、家庭や地域社会における具体的な取り組みについて提言された。また、平成11年6月の生涯学習審議会答申（「自然体験・生活体験が日本の子どもの心をはぐくむ」）においても、子供たちの心の成長には地域での豊かな体験活動が不可欠であるとして、「全国子どもプラン-緊急3か年戦略-」が進められてきた。

これらの動きに合わせて、本市教育委員会においても、家庭や地域社会の教育力の向上が大きな課題であることから、大人がもう一度自分自身を見直し、地域をあげて子供たちの健全育成にかかわっていけるようにするために、栃木県教育委員会の補助事業（平成10・11年度）である「心の教育推進モデル市町村事業」を導入し、市内5地区においてモデル事業としての実践的な研究を進めてきた。

なお、事業の実施主体は各地区の推進委員会を中心とした地域の大人であり、教育委員会事務局は栃木県教育委員会との事務手続きや連絡、具体的な活動内容への助言、予算の執行などの補助的な立場でかかわってきた。

1 心の教育推進モデル市町村事業

「心の教育推進モデル市町村事業」は、栃木県教育委員会が「『心の教育』総合推進対策」として実施しているもので、「豊かな心の育成」のための基本対策に位置づけられ、補助事業として県内10市町51地区（1市町あたり5～6地区）で実施されてきた。

(1) 事業の目的

事業の目的は、『子供の日常生活圏において、地域の大人が子供の心の問題について共通理解し、子供たちの豊かな人間性を育てるために市町村が実施する多様な活動を支援すること』（「心の教育推進モデル市町村事業実施要領」より引用）、『この事業は自治公民館等を会場に、地域の大人、PTA役員、自治会役員、教師等が集まり、子供の心の問題等について話し合ったり、話し合いの結果に基づく活動を行うもので、地域に住むすべての人々が、地域の教育について考え実践を通して地域の教育力を高めるよう努め、子供の人間性を豊かにすること』（「心の教育推進モデル市町村事業」より引用）である。

すなわち、本事業の目的は地域の活性化を図り地域の教育力を高めることであり、その第一の対象者は地域の大人である。そして、大人の地域への所属感を高め、地域活動を活性化することによって、子供たちに豊かな心を育てて行こうというものである。そのため、栃木県教育委員会においても「成人教育」として取り組んできた。

(2) 事業の内容（「心の教育推進モデル市町村事業の運用について」より抜粋）

ア 推進委員会の設置

事業の実施にあたり、実施地区に推進委員会を組織し、子供たちに豊かな人間性を育成する事業を企画し、実施する。

イ 子供たちの豊かな人間性を育成する事業

- (ア) 近隣の大人同士が、地域の子どもの心の問題を語り合う活動
- (イ) 近隣の大人と子どもの交流会
- (ウ) 子供の心を育てる諸活動

2 事業の導入にあたって

(1) 事業の導入

本市においては、これまで小学生を対象として「地域のよりよき仲間集団の育成」のために市内5地区で「少年の砦」事業を実施してきた。事業の導入にあたり、この「少年の砦」事業を「心の教育」という視点で見直すとともに、成人教育の事業としての位置付けを加えて再構成することによって、大人自身が家庭生活や地域における子供たちへのかかわり方を考え直す機会となり、地域活動を活性化することができる考えた。

(2) 足利市の教育目標との関連

本事業は、「子供たちの活動」とそれを支える「大人の活動」という二つの面がある。そこで、関連する「足利市の教育目標」を次のように考えた。

ア 子供（児童期）に関する目標（先頭の番号は教育目標番号）

- 1：郷土の自然や文化に親しみ、その保護・振興発展に努める。（～高齢期）
- 2：動植物を愛し、自然に親しむ豊かな心を養う。（乳幼児期～）
- 13：社会の一員としての自覚をもち、社会的態度を身につける。
- 18：友達と互いに協力し合うことができる。
- 27：よりよい仲間づくりをするために、不合理な差別や偏見をもたないで生活することができる。
- 32：敬老の精神を身につけ実践する。（～青年期）
- 39：家庭や地域で行う行事に積極的に参加する。（～青年期）
- 41：人格の基本となる望ましい性格を身につける。（乳幼児期～）
- 52：基礎的な知識や技能を習得し、自ら学びとる態度を身につける。（～青年期）
- 59：困難にくじけず、ねばり強くやり遂げる態度を身につける。

イ 大人（壮年期・高齢期）に関する目標（先頭の番号は教育目標番号）

- 1：郷土の自然や文化に親しみ、その保護・振興発展に努める。（児童期～）
- 3：自然を敬い、感謝の気持ちを育てる宗教心を養う。（青年期～）
- 9：健康・安全な生活環境づくりに努める。
- 10：子供の健康・安全な生活態度を育てる。
- 15：社会の一員としての役割を自覚し、責任ある言動をとる。（青年期～）
- 16：地域の集団活動に積極的に参加し、自らの役割を果たす。
- 21：自分と異なる信条・宗教・主張などを理解し広い心で接することができる。
- 22：若い世代の人たちの立場や気持ちを理解し、温かい心で人に接することができる。
- 25：子供に日常生活の中で善悪の区別がつけられるようにする。
- 31：奉仕を通して生きがいをもてる。
- 33：子供に敬老の精神を育てる。
- 42：子供の人格の基本となる望ましい性格を育てる。
- 66：高齢者としての役割を認識し、情報を若い世代に伝えることができる。

3 足利市における取り組み

(1) 実施地区

「少年の砦」事業を基にしていくことから、次の5地区で実施することにした。

<表1> 「心の教育推進モデル市町村事業」実施地区

地区名	地区内の小中学校等
三重地区	三重小学校、第一中学校、西中学校
山辺地区	山辺小学校、南小学校、矢場川小学校、山辺小学校
毛野地区	毛野小学校、毛野南小学校、毛野中学校、足利養護学校
北部地区	北郷小学校、大月小学校、名草小学校、北中学校
坂西地区	松田小学校、三和小学校、葉鹿小学校、小俣小学校、坂西中学校

(2) 推進委員会

各地区の推進委員会は、自治会をはじめとして地区内の各種機関・団体、小中学校等の代表者により構成し、具体的な事業の企画、運営についての協議の場であるとともに、地域で取り組まれている様々な活動についての情報交換、連絡調整の機会とした。

(3) 近隣の大人同士が、地域の子供の心の問題を語り合う活動

これまで、子供たちの健全育成については、小中学校のPTAや幼稚園、保育園、保育所の父母の会、地区の青少年育成会の会合など色々な機会をとらえて話し合いがなされてきており、子供たちの問題行動とその対応への関心も高まっている。そこで、「地域をあげて子供たちの健全育成を」という、地域全体を包む大きな流れにするために、子供をもつ親や一部の関係者だけの活動ではなく、地域の大人が誰でも自由に発言し合える場として「家庭教育地区懇談会」を実施した。この懇談会は全市的な取り組みとして、本事業を実施していない地区においても、公民館地区単位（8地区）で開催し、教育長をはじめ市教育委員会事務局の職員も参加して、各地区の抱えている課題や青少年の実態等の把握にも努め、地域と行政との連携が深められるようにしてきた。

なお、この懇談会は、家庭や地域を見直し、地域で子供たちを育てていくためのきっかけ作りとして一石を投じるもので、全体で意見を一つにまとめるのではなく、自分の考えや実践を発言し合い、言いっ放し、聞きっ放しの中から参加者が家庭や地域での活動のヒントをもち帰れるようにした。

(4) 近隣の大人と子供の交流会

大人と子供の交流会は、大人と子供が話し合い、お互いの考えを理解し合う場である。そこで、交流会の設定については、子供たちの生の声を聞くことができるよう、改まって話し合う場を設けるのではなく、高齢者も含めた地域全体の交流活動として実施し、それぞれの活動の中で自然に話ができるように考えた。

特に、核家族化、都市化が進みつつある現状から、三世代の交流に重点を置き、日本人に引き継がれてきた風習や遊びを通して、高齢者の知恵や技術が子供たちばかりでなく地域の大人にも伝えられるようにと考え、農作業体験や餅つき、焼きいも大会などを計画の中心とした。

また、本事業の基となった「少年の砦」事業は、対象者が地区内の小学校4年生から6年生となっているため参加者が限られてしまう。そこで、大人と子供の交流会については、「少年の砦」の活動の一部という位置付けをもたせながらも、地域の誰もが自由に、そして親子でも参加できるプログラムとして広く参加者を募った。

更に、年度末の活動日には、1年間の活動に関する反省や感想などを子供たちから聞く機会を設け、子供た

ちの意見を活動に反映できるようにしてきた。

(5) 子供の心を育てる諸活動

各地区とも「少年の砦」事業を基にしながら、「他者への思いやりや社会性を育てる活動」「美しいものや自然に感動する心を育てる活動」として、異年齢集団による農作業体験やキャンプなどの野外活動を軸に展開した。その際、育成会を中心として婦人会や老人クラブなどが、それぞれの団体の得意分野を担当しながら指導、援助にあたった。

4 事業の結果

本事業は、平成10・11年度の継続事業であり、本稿を作成時は「近隣の大人と子供の交流会」と「子供の心を育てる諸活動」は実施途中であることから、平成10年度の活動を中心として報告したい。

(1) 推進委員会

各地区とも、年度当初に活動の全体計画とその運営についての協議を行った他、それぞれの委員が、地区の青少年育成会や婦人会、老人クラブなど、地域の団体との連携を図るため折に触れて活動への理解を求めた。

また、推進委員会も「大人同士が、地域の子供の心の問題を語り合う活動」として位置づけ、各機関・団体がとらえている子供たちの実態やそれぞれの活動についての話し合いがもたれた。

(2) 近隣の大人同士が、地域の子供の心の問題を語り合う活動

ア 家庭教育地区懇談会

家庭教育地区懇談会の実施に際しては、推進委員を中心として懇談会のための実施委員会を組織し、その開催期日、内容、役割分担、広報と募集方法などを協議した。この会議の席でも、現在の子供たちの様子や大人としての考え方、子供たちへの接し方など様々な意見が出され、各地区とも子供たちの健全育成に積極的に取り組もうという意識が深められた。

2年間に各地区とも2～3回の懇談会を開催したが、山辺、北部、坂西の3地区は、地区の範囲が広いいため、地区内をさらに公民館区単位に区切り、それぞれの地区に実施委員会を組織して地域に根差した活動となるようにした。一方、三重、毛野地区においては、平成10年度は全体会形式で実施し大人数での懇談会であったが、平成11年度は前年度の参加者の要望から少人数での分散会形式を取り入れ、より具体的な話し合いができるように工夫、改善を加えた。(表2 参照)

<表2> 平成10・11年度「家庭教育地区懇談会」実施結果

地区名	実施期日	会場	参加者数
三重地区	平成10年 8月20日	三重公民館	106名
	平成11年11月 2日	三重公民館	66名
山辺地区	平成10年 8月28日	山辺公民館	87名
	平成11年 6月11日	矢場川公民館	123名
毛野地区	平成10年 9月18日	毛野公民館	84名
	平成10年10月14日	山川ふれあいセンター	94名
	平成12年 2月15日	毛野公民館	73名
北部地区	平成10年10月16日	北郷公民館	105名
	平成11年 7月23日	名草公民館	117名
坂西地区	平成10年11月20日	葉鹿公民館	103名
	平成11年 9月24日	三和公民館	108名
	平成11年10月22日	小俣公民館南分館	108名

イ 懇談会での主な意見

家庭教育地区懇談会で出された意見を集約すると次のようになる。

<表3> 「家庭教育地区懇談会」における主な意見

区分	意見の内容
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> ・家の中で子供は一人で遊んでいて地域に子供の姿が見られない。 ・今の子は昔の子より複雑な反応をすると思う。 ・子供が生活の知恵を身につける機会が無くなってしまった。 ・今の子は家庭に恵まれ物質に恵まれ過ぎていてかえって駄目だ。
育てたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・勤労精神、働くことに対する喜びを伝えたい。 ・小学生時代が子供の人生を作りあげる土台ではないか。 ・子供の自主性が育っていない。達成した時の感動が欲しい。 ・充実感は苦しみの中から生まれる。 ・家庭で『我慢すること』を教えていきたい。 ・幼児期に基本的な習慣、情操面、感動、感謝、思いやりを育てたい。
大人の悩み	<ul style="list-style-type: none"> ・父親の悩みは、子供と気持ちを開いての会話がないうこと。 ・家庭内で父親のポジションが低い。 ・親も自信がもてない。 ・親を教育すること。親になりきれない親が多い。
地域の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・親も地域の活動に参加していくとよい。 ・次代を担う若い人、若いお母さんを地域で育てなければならない。 ・物心共に子供たちに色々なことを学ばせたい。そこに地域の活動がある。 ・学校と家庭の中間で、どちらも見えない子供たちの姿を地域の人が見ている。 ・育成会では、行事に参加してくれる子だけへのかかわりしかできない。
家庭の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・食事は親子のコミュニケーションの大切な場である。 ・昔の嫁姑の争いのないようにしていきたい。 ・問題の原因は大家族の崩壊。日常生活の中から身につくのではないか。 ・自分の子だけに楽をさせたいという親が自己中心的な子を育てる。 ・自分の親が教えてくれたことを自分の子に教えていけたらと思う。
子どもとの接し方	<ul style="list-style-type: none"> ・父と母の出番のタイミングが合わない家族も多い。 ・子供に注意すると子供との間が広がってしまう。 ・子供の考えと大人の考えの違いを子供と話し合っていきたい。 ・優しいのと甘いのは違う。厳しいのと冷たいのは違う。 ・悪い子はいない。周りの大人が、どこが悪く、どこで他の人に迷惑をかけているかを言う勇気、それが地域の教育力にかかわってくる。 ・同じ親が育てても違った子になっていくことを感じている。 ・良い所を伸ばしていくと悪い所は減っていく。 ・子供は大人を良く見ていて、同じようなことをしている。
あいさつ声かけ	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつは、大人になっても人間関係を広げるために大事なものだ。 ・あいさつはなくてはならないものだ。 ・大人があいさつができないことを考えたい。 ・小さなあいさつから生まれる信頼がある。 ・いつも子供に声をかけている。私たち自身が行動しなければならない。
学校と家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育ばかりが論議されていて家庭や地域に目が向いていない。 ・学校だけが教育の場ではないと考えないと、親も教員も大変だ。 ・学校は授業をやる所で、基本的なしつけは家庭でやってほしい。 ・学校で教えていることが、家庭にも地域にも伝わると相乗効果もある。

ウ 参加者の感想

- ・ 子供が小中学校に在学中の親だけでなく、様々な年代の人達と一緒に、子供のことについて話し合いをもつことができてよかった。
- ・ 子供たちの実態についての理解が深まった。
- ・ 1回で終わらせず、続けて行ってほしい。
- ・ 大人数であったので、小グループでの話し合いもしたい。

(3) 近隣の大人と子供の交流会

ア 実施結果（活動内容・参加者数）

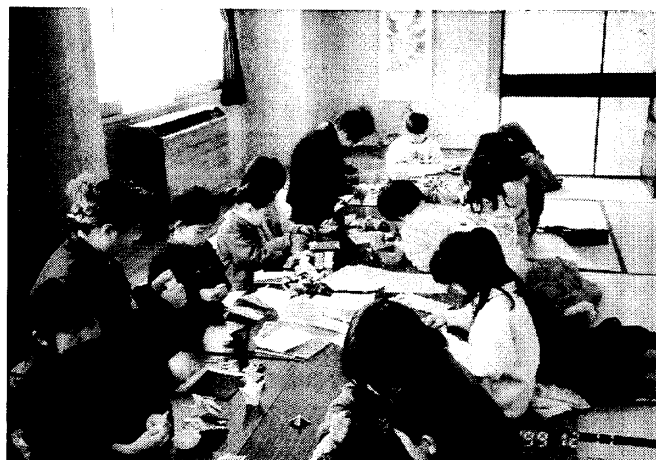
大人と子供の交流の機会は、前述したように活動の中で自然と会話がなされるような内容で実施した。平成11年度もほぼ同様である。（表4 参照）

<表4> 平成10年度「大人と子供の交流会」実施結果

地区名	実施期日	内 容	参加者数	
			大人	子ども
三重地区	6月27日	グランドゴルフ大会	62名	44名
	12月12日	三世代交流会（餅つき、しめ縄作りなど）	56名	37名
	3月28日	農作業体験、地域の活動を考える	34名	29名
山辺地区	6月28日	親子で野外活動①（砦を作ろう）	18名	52名
	11月 1日	親子で野外活動②（焼きいもパーティー）	10名	35名
	2月28日	農作業体験、地域の活動を考える	9名	35名
毛野地区	11月29日	親子、三世代交流餅つき大会	19名	34名
	3月 7日	農作業体験、地域の活動を考える	13名	29名
北部地区	12月 6日	親子で創作活動	8名	29名
	2月28日	農作業体験、地域の活動を考える	19名	37名
坂西地区	12月13日	親子交流餅つき大会	20名	31名
	2月21日	農作業体験、地域の活動を考える	16名	34名

イ 参加者の感想

- ・ 父親の場合、なかなか公民館の学習等に参加できなかったが、この行事に参加してみて、自分が考えている子供の心とのズレを認識した。
- ・ 大人が便利だと考えている物や環境が子供の心を墮落させることに気づいた。
- ・ 家庭ではなかなかできない体験をさせていただいた。
- ・ 色々な学校の人と仲良くなった。
- ・ サツマ芋の苗植えをやって、農家の人の大変さ、作る喜び、食べ物を大切にする事がわかった。



高齢者から折り紙を教わる（平成11年12月11日：三重地区）

(4) 子供の心を育てる諸活動

ア 実施結果（活動内容・参加者数）

<表5> 平成10年度「子供の心を育てる諸活動」

地区名	実施期日	内 容	参加者数
三重地区	6月21日	①野外活動（農作業体験：じゃがいもの収穫）	48名
	8月18日～19日	②野外活動（農作業体験、みんなで考えた料理を作ろう、キャンプ）	40名
	11月1日	③野外活動（農作業体験：そばの収穫）	38名
	11月15日	④生活体験（そば作りと昼食会）	46名
山辺地区	6月21日	①野外活動（農作業体験：じゃがいもの収穫）	55名
	7月5日	②野外活動（野外調理）	55名
	8月18日～19日	③野外活動（キャンプ、山の中で遊ぼう）	40名
	1月24日	④創作活動（凧作り）	33名
毛野地区	6月14日	①野外活動（農作業体験：じゃがいもの収穫）	42名
	7月5日	②野外活動（みんなで考えた料理を作ろう）	35名
	7月25日～26日	③野外活動（キャンプ）	29名
	11月8日	④野外活動（サイクリングと自然観察）	19名
北部地区	6月14日	①野外活動（農作業体験：じゃがいもの収穫）	36名
	6月27日	②野外活動（魚釣り、魚のつかみどり）	43名
	7月25日～26日	③野外活動（キャンプ）	26名
	11月23日	④野外活動（農作業体験：さつまいもの収穫）	38名
坂西地区	6月14日	①野外活動（農作業体験：じゃがいもの収穫）	41名
	6月27日	②野外活動（火起こし体験、野外調理）	33名
	7月25日～26日	③野外活動（キャンプ）	29名
	10月11日	④野外活動（魚釣り、魚のつかみどり）	27名
交流会	9月6日	深高山～石尊山登山、ふるさと学習資料館見学	135名

多くの地区において、じゃがいもの収穫が第1回目に実施されているが、これは前年度の「少年の砦」の活動の最終回に植えられたもので、感謝の気持ちをもって活動を引き継いでいこうという意図が込められている。また、いくつかの地区で実施された「みんなで考えた料理を作ろう」という活動は、子供たちの自主性や活動への積極的な参加を引き出すためには有効なプログラムであった。

イ 参加者の感想

- ・ そばがどうやってできるのかがよく分かったが、台風のため、収穫ができなくなってしまって残念だった。
- ・ 学校や家でできないことをやるのはおもしろい。
- ・ 違う学校や学年の子が多くて友達ができるか不安だったが、仲良くなった。
- ・ 養護学校から初めて地域の活動に参加できてよかった。
- ・ ハイキングで6 km も歩くのはいやだったけれど、がんばって歩いて、自分が大きくなったような気がした。

5 成果と課題

(1) 推進委員会

各地区とも、本事業に限らず広く地域の活動の企画や調整的な機能も果たし、小中学校のPTAや青少年育成会、婦人会、老人クラブなど青少年の健全育成にかかわる諸団体の活動について、お互いの理解が深められ、自治会を中核とした地域活動の見直しがなされた。

本事業終了後も地域における協力体制を維持し発展させていくことが課題である。

(2) 近隣の大人同士が、地域の子供の心の問題を語り合う活動

各会場とも多くの参加者を得ることができ、児童生徒の保護者ばかりでなく、祖父母、教職員、各種機関・団体関係者など、老若男女それぞれの立場から子供の問題、家庭や地域の問題についての意見が出され、有意義な会となった。地域の中に一石を投じるといった目的は十分に達成されたと考えられる。

各会場で実施した事後アンケートの結果でも、「懇談会は今後も必要である」、「再度懇談会を開催してほしい」という意見が大多数を占め、その内容や持ち方についての具体的な提案など多くの意見が寄せられた。これは、地域の大人として、地域活動に参画していこうという気持ちをもつ人が増えてきたということである。そのため、今後は推進委員会を中心とした地区独自の活動として定着させていくことが重要であると考えている。

(3) 近隣の大人と子供の交流会

三世代の交流に重点を置きながら、色々な活動を通して地域の大人と子供たちの相互理解が深められた。

公民館でも世代間交流の事業を実施している。今後は、地域と行政の連携・融合を推進し、効率良く、効果的な交流の機会を提供していくことが必要ではないかと考えられる。

(4) 子供の心を育てる諸活動

子供たちに多様な体験活動を提供することができたが、学校と違い、年に何回もないため、大人主導での活動になりがちである。大人と子供の役割分担を考え、指導、援助する場面と見守る場面を明確にしていき、子供たちの自主的な活動を引き出していくために、今後、さらに子供たちが自ら考え、選択し、活動するというプログラムを開発したい。

また、主に小学生が中心となっているが、中学生、高校生が指導的な立場で参画できるような組織を考えていく必要がある。

評

現在、社会では、都市化や過疎化が進み、人間関係が希薄化する中、文化や規範を共有する場である地域社会の基盤が揺らぎ地域の教育力の低下が指摘されています。

また、中央教育審議会第一次答申、平成10年6月の答申、生涯学習審議会答申においても、地域の教育力の向上が求められています。

本研究は、大人がもう一度自分自身を見直し、地域をあげて子供たちの健全育成にかかわっていただけるようにするため、本市が県教育委員会の補助事業「心の教育推進モデル市町村事業」を導入し、市内5地区においてモデル事業として、実践的研究を進められたものです。そして、今後の地域の活性化と地域の教育力の充実に当たって示唆を与えてくれおります。

具体的には、下記の事項が特筆されます。

- (1) 事業導入にあたり、これまで小学生を対象として「地域のよりよき仲間集団」の育成のために市内5地区で実施してきた「少年の砦」事業を「心の教育」という視点で見直すとともに、成人教育の事業としての位置付けを加え、再構成することで、大人自身に家庭生活や地域における子供たちへのかかわり方を考え直す機会と地域活性化を図る機会を与えた。
- (2) 事業実施にあたり実施地区に自治会をはじめとした地区内の小学校PTA・青少年育成会・婦人会・老人クラブの代表者で構成する推進委員会を設置し、具体的な事業の企画、運営について協議の場をもつとともに、諸団体の情報交換、連絡調整の機会とした結果、本事業を含めた地域活動の企画・調整的機能を果たした他、諸団体の活動についてもお互いの理解が深められ、自治会を中核とした地域活動の見直しが行なわれた。
- (3) 「地域をあげて子供たちの健全育成を」という、地域全体を含む大きな流れにするために、子供をもつ親や一部の関係者だけの活動ではなく、地域の大人が誰でも自由に発言し合える場として「家庭教育地区懇談会」を実施し、教育長をはじめ市教育委員会事務局の職員も参加して、各地区の抱えている課題や青少年の実態等の把握にも努め、地域と行政との連携が深められるようにしてきた。また、この懇親会は、家庭や地域を見直し、地域で子供たちを育てていくためのきっかけ作りとしても一石を投じるものとなった。
- (4) 大人と子供が話し合い、お互いの考えを理解し合う交流会の設定については、核家族化、都市化の進む現状から、三世代交流に重点を置き、農業体験や餅つきなどを実施し、地域の誰もが自由に、親子でも参加できるプログラムとして広く参加者を募ったことから、大人と子供たちの相互理解が深められた。
- (5) 「他者への思いやりや社会性を育てる活動」「美しいものや自然に感動する心を育てる活動」として、異年齢集団による農作業体験やキャンプなどの野外活動が展開され、育成会、婦人会、老人クラブなどが指導支援にあたることができた。

本研究実践は、地域の大人たちが子供たちの気持ちををとらえ、手を携えて子供たちを育てていく環境作りへの礎となるものです。さらなる改善を加えられ、各地区の地域教育力がますます進展、向上することを期待しております。